日赤看会誌　J Jpn Red Cross Soc Nurs Sci Vol.17, No.1, pp.89-90, 2017

第17回日本赤十字看護学会学術集会

テーマセッションⅡ

“冬季災害看護学”へのお誘い

An introduction to disaster nursing for winter season

座　　長　尾山とし子　Toshiko Oyama　（日本赤十字北海道看護大学）
話題提供　根本　昌宏　Masahiro Nemoto　（日本赤十字北海道看護大学）
水谷　嘉浩　Yoshihiro Mizutani　（Ｊパックス株式会社）
尾山とし子　Toshiko Oyama　（日本赤十字北海道看護大学）

キーワード：シェルター、冬季、災害看護
key words：Shelter, winter season, disaster nursing

日本赤十字北海道看護大学のある北見市は、日本で最も寒い10万人都市である。１月中旬から２月上旬の平均最低気温はマイナス17℃。このような積雪寒冷地域で、もし冬に停電が起きたら？もしくは地震や津波に襲われたら？本州でも大規模施設の暖房は電気を使用する。災害が発生し、避難所に避難しても停電では暖房が使えない。春から夏そして秋までに起こる災害と、冬場の災害とでは避難者への保健医療活動は大きく異なり、低体温症対策、インフルエンザ対策など冬独自の考えが必要である。

そこで、本テーマセッションでは、「冬の災害」と災害看護をかけあわせて“冬季災害看護学”と題して、皆さまと一緒に冬の救援活動について考えてみたい。

冬期の災害のために

根本　昌宏

北海道はもちろん、本州でも大規模施設の暖房は電気を使用する。オール電化住宅はもちろんのこと、FF式ストーブも使用できない。我々は秋から厳冬期にかけて停電させた体育館の環境測定を行ったが、天井高のある容積の大きい施設を簡易暖房することは困難であること、敷設したブルーシートは居住空間には適さないこと、床下からの冷気によって室温が15℃あっても就寝できないことを明らかにしている。これら冬の事象から生ずる特有の災害関連疾患として、低体温症、循環器系疾患、インフルエンザそしてエコノミークラス症候群が考えられる。これらに共通した事象は寒さである。体育館の中に天井高を低くした「シェルター」を展開し、内部に段ボールベッドを敷設することで、寒さ対策になり得ることが明らかとなった。寒さを伴う災害は想定外であり、冬期の避難では危険とされる車中泊も念頭におき、より実践的な展開手法を議論する必要がある。

避難所から雑魚寝を無くすために

水谷　嘉浩

東日本大震災の避難所では多くの人が低体温症で亡くなったが、当時は体育館などの冷たい床に防災毛布１枚の非常に厳しいものだった。そこで段ボールで寝床を作れば低体温症を予防できるかもしれないと段ボールベッドは開発された。しかし当初は簡易ベッドの必要性はほとんど認識されておらず、ましてや段ボール製ともなると受け入れの余地も無い状況だったが、簡易ベッドの使用は低体温症だけではなくエコノミークラス症候群や廃用症候群など多くの深刻な健康被害を予防しうることが明らかになり、その後も少しずつ普及した。この度の熊本大震災では、益城町を中心に避難所の生活環境の改善が組織的に行われ、段ボールベッド約5,300床が設置された。とりわけ、政府の推奨や業界団体が主導した初めての取り組みは評価できた。ただ、益城町以外の普及には至らなかったこともあり、今後はすべての避難所で雑魚寝が解消さ

れるように仕組みを作ることが重要である。

災害救援活動における
避難生活の現状から思うこと

尾山とし子

東日本大震災は冬型の災害といえるだろう。３月末に避難所である旧釜石第一中学校へ派遣され活動した。この時の避難所内の状況は劣悪そのものだった。暖を取るための石油ストーブからの空気汚染、パーテーションや通路が無く雑多に避難者が集まり、おまけに、床は人工芝で芝の中に入り込んだ泥が埃となって舞っていた。空気清浄機が設置されてはいたが、やはり呼吸器系を煩う被災者の方が多かった。看護は、避難所で発生する被災者の様々な生活上の悩み･不満･不安について、環境管理的側面、感染管理的側面、対象特性的側面、安全面的側面、健康問題的側面からアセスメントし、支援していかなければならない。特に冬場は低体温によって様々な健康問題を惹起する可能性があることを心得ておく必要があるだろう。

これまで、看護は病院という施設内だけに止まっていたように思う。災害が人ごとでは無くなった今、災害時の看護ニーズの広がりを看護者自身が認識すると共に、その眼を外向きへ解放し、災害という悪い条件下でもその人らしく生きられるように向き合い、工夫し、創造する力を養う必要があると考える。

結びに

冬期に起こる災害は、北海道だけの問題では無い。また、避難者の方達だけで無く、救援者にとっても影響を及ぼす重要な課題である。これからも様々な機会を通じて、春夏秋冬に備えた災害救援のありかたを皆さまと検討していくことを提案していきたい。